

江口忍の マイ・ オピニオン

MY OPINION



— 第1回 —

求められる情報提供機能の強化

名古屋駅前 の防災を 考える

共立総合研究所
副社長・名古屋オフィス代表

江口 忍

1 はじめに

今回からこのコーナーを担当することになりました江口です。「マイ・オピニオン」というタイトルにあるように、ここでは“何か”に対する私の考えを、本格的な調査レポートに比べてソフトで読みやすく書いていこうと思います。ここでいう“何か”とは、経済に関することに限りません。これから何を取り上げていくのか今は見当が付きませんが、どんなテーマが出てくるか自分自身も楽しみです。

2 絵空事には思えなくなった「名駅に津波」

さて、初回に取り上げるのは、「名古屋駅前の防災対策」です。私は現在名古屋駅前（以下名駅）にある共立総合研究所名古屋オフィスで働いています。名駅に移る前は大垣の本社におりました。私の家は岐阜市内で、職場が名駅に変わると決まった時、「大垣より遠くなるけれど名駅なら便利だからまあいいか」と気楽に考えていました。ところが、私の職場となる大垣共立銀行の「OKB Harmony Plaza 名駅」のオープンが迫った3月11日、あの東日本大震災が発生しました。津波が凄まじい勢いで街を飲み込んでいく映像に誰もが大きな衝撃を受けたと思います。津波被害が甚大だった宮城県石巻市を流れる北上川では、津波の遡上で河口から15km以上上流の地点まで浸水しました。震源地から遠く離れた東京でも交通機関が一斉にストップし、帰宅難民が街に溢れました。

今回の大震災では、たまたま被害のなかった地域でも、多くの人々が「もしかしたら自分の住んでいる地域で起きたかもしれない」と、被災された方のことを自分に置き換えて考えたのではないのでしょうか。私も、もし工作中に大地震に襲われたらどうなるだろうかと、名駅エリアの防災について強く意識するようになりました。

名駅エリアは名古屋駅ができるまで沼地や田んぼだっ

たところで、標高は2~3mほどしかありません。そして名駅エリアの南にある旧笹島貨物駅跡地の再開発エリア、「さしまライブ24地区」には名古屋港に流れ込む中川運河の起点があり、ここから名古屋港まではわずか8.4kmの距離です。東日本大震災が起きる前まで名駅を津波が襲うかもしれないなんて考える人はまずいなかったでしょうが、あれほどの津波被害を目の当たりにして、今では名駅に津波というのも決して絵空事とは思えなくなりました。

津波の浸水被害予測で有名な名古屋大学の川崎浩司准教授の研究によると、東海・東南海・南海の三連動地震がマグニチュード9.0の規模で発生し、高潮防潮堤をはじめ名古屋港一帯の津波を遮る構造物が地震による地盤沈下や倒壊ですべて機能を失うという最悪のケースでは、名古屋港の津波の高さは5mに達し、中川運河を遡上する津波によって名駅でも浸水が起これと予測されています。地震と同時に名駅で浸水が始まるわけではありませんが、もし名駅の地下街や地下鉄にいたとしたら大変不安になるはずです。

また、名駅で働いていると帰宅難民の問題も非常に気になります。2011年9月に台風15号が東海地方を直撃して大きな被害をもたらしました。名古屋周辺の鉄道は昼頃から止まり始め、夕方からのラッシュ時には地下鉄と新幹線を除くほぼすべての鉄道がストップしました。私はこの日たまたま休暇を取っていて、運動会の代休で学校が休みだった小学生の子どもを連れて名古屋港水族館に行っていました。1日遊んでさあ帰ろうと地下鉄で金山駅に戻ったら、東海道線も名鉄も全面ストップで当面運転再開の見込みはないとのこと。このため最悪の場合、名駅のオフィスで夜明かしくすることも覚悟しつつ、とりあえず地下鉄で名古屋駅まで行くと新幹線だけは動いていたので、岐阜羽島駅経由でどうにか自宅にたどり着きました。

3 情報伝達機能を重視したJR大阪駅

以前から感じていたことですが、鉄道が止まり、帰宅難民が出るような状況になると、名古屋駅では情報を手に入れるのにかなり苦労します。例えば、改札口に設置されている運転状況を表示する案内画面はとても小さくて、改札口周辺が混雑している時にはなかなか見えません。事故などでJRが運転を取りやめて名鉄に振替輸送する場合には、「広小路口で振替乗車券をもらって下さい」という構内放送が流れますが、混雑時には周囲の喧噪でかき消されてしまいます。また、普段名古屋駅を利用しない人は広小路口がどこかわからないので駅員に場所を聞こうとしますが、駅員の周りは運転再開の見通しを訊ねる乗客などで人だかりができていて簡単には近づけません。このように鉄道が止まると名古屋駅ではあちこちで小さな混乱が起きます。

どうしてそうになってしまうかという、それは、駅利用者への情報提供手段が十分ではないからです。下の写真は、2011年5月に開業したJR大阪駅です。駅の北側にある「アトリウム広場」と呼ばれるオープンスペースには、大

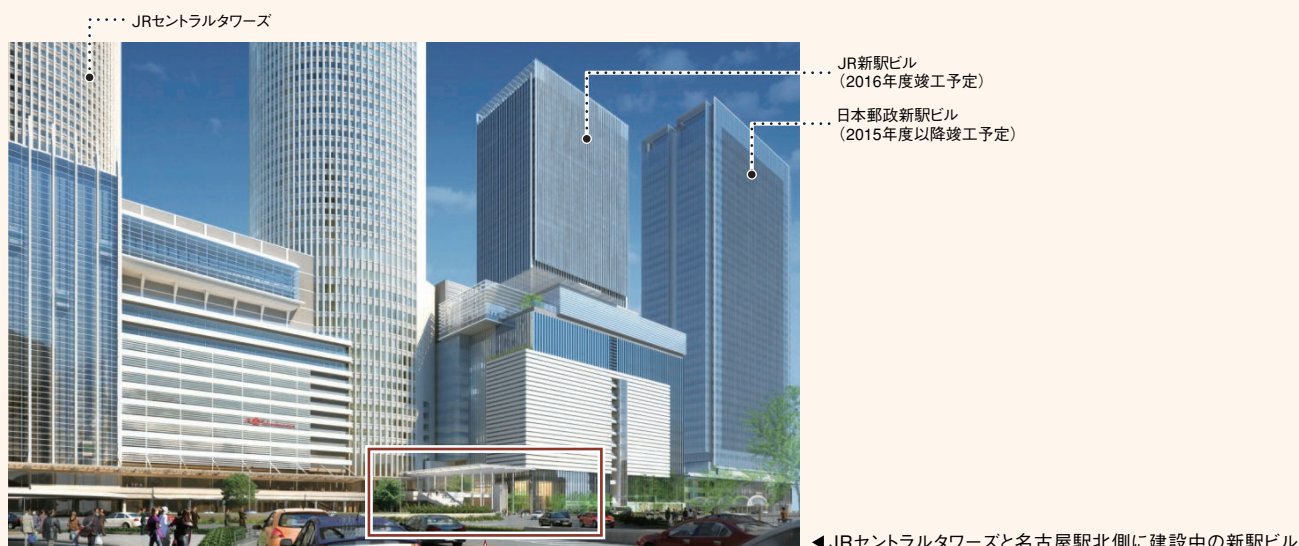


▲JR大阪駅「アトリウム広場」(筆者撮影2011年6月16日)

名古屋駅前の防災を考える

型のデジタルサイネージ(電子掲示板)が2つ設置されています。普段は大阪駅の駅ビルに入居する商業施設の催し物やコマースなどを流していますが、緊急時には避難に関する情報や鉄道の運転状況などが案内されるそうです。大阪駅改札内側の通路にも2つのデジタルサイネージが設置されており、普段は様々な広告が映されています。これらのサイネージ、距離が少し離れているのですが、実はお互いが連動して動いていて、ちょっと言葉

では上手く説明できないのですが、見ていてなかなか面白いものです。こうしたサイネージも緊急時には利用者への情報提供のツールとして利用できます。大都市のターミナル駅として最新機能を誇るJR大阪駅は、駅の利用者への情報提供に関して非常に配慮が行き届いています。これに比べると10年以上前にできたJR名古屋駅はどうしても古く見えてしまいます。ただし、情報提供手段の乏しさは決してJRに限ったことではなく、名鉄、近鉄、地下



2階デッキのオープンスペース



▲現状(筆者撮影 2011年10月11日)



▲イメージ図(JR東海プレスリリース 2010年5月19日)

鉄のどれも共通する問題点です。むしろ、駅構内のスペースにゆとりがあるJRは、帰宅難民に対する総合的な対応力という点では他社より強い方だといえるかもしれません。

愛知県の試算によれば、平日の昼間に地震等で全ての鉄道がストップした場合、名古屋市では47万人の帰宅困難者が発生すると予測されています。そしてこのうちの多くが名古屋駅で発生することになります。名駅には栄のような広場や公園といった人が滞留できるスペースがほとんどありません。そのため、これほど多くの帰宅困難者が出れば人が車道に溢れ出たり、周辺のビルに待避しようとしたりするでしょう。仮に屋外で浸水が始まることにでもなれば大混乱に陥るに違いありません。そんな時こそ人々に早く正確な情報を知らせることが必要ですが、今の名駅はこの情報伝達機能が非常に弱いのです。

4 新ビル建設を機に情報伝達機能の強化を

JRセントラルタワーズの誕生によって始まった「名駅ビッグバン」から12年が経ちました。この間に名古屋駅は劇的な発展を遂げましたし、この先も三菱地所の「大名古屋ビル」(2015年度)やJR東海の「名古屋ターミナルビル」(2016年度)など超高層ビルへの建て替えが続きます。名駅の発展にはまだまだ翳りが見えません。しかし、防災の観点からは、果たして今のまま開発を続けていってよいのか心配になります。

とはいうものの、名駅でハード面を含めた本格的な津波対策や帰宅困難者対策をやらうとするとかなり大がかりな話になりますし、巨額の費用がかかります。ですから、とりあえずは比較的手を付けやすく、しかも今の名駅の大きな弱点でもある情報伝達手段を整えることから始めていくのがよいのではないのでしょうか。

記憶に残っている方も少ないかもしれませんが、ミッドランドスクエアに建て替えられる前にあの場所にあった「毎日ビル」の壁面には毎日新聞社の大画面ビジョンがありました。

普段は文字ニュースや広告映像が流れていたと思います。あのような大画面ビジョンを緊急時の情報伝達手段として活用できれば、名駅の防災に大きな効果があると思います。

JR東海から公表されている2016年度竣工予定の旧名古屋ターミナルビル建て替えによる新しいビルの計画資料によると、名古屋駅桜通口の北側の2階デッキ部分には屋根のあるオープンスペースが設けられるようです(P53写真)。新しいビルが完成すると、ここは名駅の人の流れの中心になるでしょうから、ここをイベントや展示会用のスペースとして貸し出すことで収益源として活用しつつ、同時に名駅の賑わいを一段と高めようという狙いがあるのだらうだと思います。ただ、せっかくこうしたスペースを設けるのであれば、ここに大型のデジタルサイネージのような情報伝達機器を常設して普段はイベント等に利用し、緊急時・災害時には鉄道各社の運行状況や避難情報などの提供に活用できるようにすればよいと思います。

繰り返しになりますが、災害への備えという点で名駅には多くの課題があります。あと5年もすれば名駅は確実に今よりもさらにスケールアップします。こうした急速な発展に防災機能が追いついていけるのか、名駅で働く者の一人としてこれからも気にかけていきたいと思っています。

えぐちしのぶ
江口 忍

PROFILE

1965年(昭和40年)名古屋生まれ。1987年名古屋大学法学部卒。日本長期信用銀行にて約10年勤務後、1997年1月に設立間もない共立総合研究所に入社。現在までの15年間に約40本の調査レポートを執筆。2010年から副社長。2011年3月、名古屋駅前の「OKB Harmony Plaza 名駅」に名古屋オフィスを開設したのに伴い同オフィス代表に就任。名古屋人としての皮膚感覚とデータに基づくユニークな名古屋経済の分析で知られ、新聞・テレビへの登場機会も多い。

